

THE JAPANESE CONFERENCE ON THE BIOCHEMISTRY OF LIPIDS

c/o Congre

Ko-sai Kaikann Building

Kojimachi 5-1, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8481, Japan

JCBL@congre.co.jp

Tel : 81-3-5216-5588 Fax: 81-3-3263-4032

日本脂質生化学会事務局

〒102-8481

東京都千代田区麹町5-1 弘済会館ビル (株) コングレ内

JCBL@congre.co.jp

Tel : 03-5216-5588 Fax: 03-3263-4032

2006



日本脂質生化学会
(JCBL)

日本脂質生化学研究 サークュラー 2006

目 次

第 48 回日本脂質生化学会のお知らせ	1
平成 18 年度日本脂質生化学会 総会・幹事会のお知らせ	7
第 48 回日本脂質生化学会 発表演題の募集	8
第 48 回日本脂質生化学会を開催するにあたって	11
工藤 一郎	
第 47 回日本脂質生化学会を主催して	12
吉本 谷博	
第 47 回日本脂質生化学会に参加して	13
吉村 征浩	
コルシカ島で開かれた第 46 回国際脂質生化学会議 (ICBL) に参加して	15
中村 和生	
第 47 回国際脂質生化学会議 (ICBL) のご案内	18
「実際と情報-大山の麓で考えたこと」	19
岡崎 俊朗	
脂質生化学からこれまでの自分の研究を願みて	22
村上 誠	
会の活動状況	26
賛助会員	31
会則	32
学会事務の取り扱いと内容の連絡先	34

メインテーマ：「脂質生化学研究：新時代への胎動」

期日 : 2006 年 6 月 8 日 (木)・9 日 (金)

会場 : 日本科学未来館 7階

「みらい CAN ホール」、「イノベーションホール」及び「会議室 2」

東京都江東区青海 2-42

Tel : 03-3570-9151 (代表)

実行委員長：工藤一郎 昭和大学薬学部 衛生化学教室

〒142-8555 品川区旗の台 1-5-8

Tel : 03-3784-8196

Fax : 03-3784-8245

E-mail : kudo@pharm.showa-u.ac.jp

発表形式 : すべて口頭発表

A講演：発表 15 分＋討論 5 分＝20 分

B講演：発表 10 分＋討論 5 分＝15 分

講演時間は変更することもあります。

すべて液晶プロジェクターを使います。

特別講演 1 E.A. Dennis University of California, San Diego, USA

特別講演 2 W. Cho University of Illinois at Chicago

特別講演 3 W.-C. Chang National Cheng Kung University, Taiwan

シンポジウム 1:「脂質シグナリング研究の最前線:新たな世代へ」

シンポジウム 2:「細胞内脂肪蓄積と代謝調節」

第4回イヴニングセミナー： 竹縄忠臣 東京大学医科学研究所

事前参加申込締切：5月12日（金）（5月下旬頃に参加証を送付します）

参加登録費、懇親会費はできるだけ事前にお申し込みください。

名誉会員、賛助会員の皆様には別途ご案内申し上げます。

学会参加登録費：事前参加登録費 一般 5000 円 学生 3000 円

：当日参加登録費 一般 6000 円 学生 4000 円

（非会員で参加される場合要旨集代を別途申し受けます）

懇親会 日時：6月8日（木）19:00 から

会場：日本科学未来館 7階展望レストラン 「5K-PLANETS」

東京都江東区青海 2-42

Tel：03-3570-9171

参加費：一般 5000 円 学生 3000 円

振込先：郵便振替口座 00120-8-686383
第48回日本脂質生化学会実行委員会

なお、窓口での振込手数料が4月3日に改定されるそうです。1万円までの振込みは、窓口で現行70円が100円に、ATM利用では現行60円のまま据え置きですので、早目に振込むかATMを利用するようお勧めします。

宿泊関係：宿泊施設については、実行委員会では特にご案内いたしません。
各自でお申し込みください。

会場への交通：羽田空港から約45分

品川駅から約30分

新宿駅から約40分

（詳細は、6～8ページをご覧ください）

**第48回日本脂質生化学会
シンポジウム、イブニングセミナー、
特別講演のお知らせ**

シンポジウム1：6月8日（木）

「脂質シグナリング研究の最前線；新たな世代へ」

オーガナイザー： 村上 誠 （東京都臨床医学総合研究所）

横溝 岳彦 （九州大学医学研究院）

- 1-1 シクロオキシゲナーゼ経路とリポキシゲナーゼ経路
のクロストーク機構

昭和大学薬学部

桑田 浩

- 1-2. 脂質メタボロミクスによる cPLA2 の生理機能解析
東京大学大学院医学系研究科

北 芳博

- 1-3. PG 受容体ノックアウトマウスの遺伝子プロファイリング
京都大学大学院薬学研究科

杉本 幸彦

- 1-4. ω -3 脂肪酸由来の新しい生理活性脂質 Resolvin とその抗炎症作用
Brigham & Women's Hospital / Harvard Medical School

有田 誠

- 1-5. Phospholipase C delta タイプの生理機能
東京薬科大学生命科学部ゲノム情報学研究室

中村 由和

- 1-6. ホスホイノシタイドキナーゼ/ホスファターゼの
マウス個体における機能

秋田大学医学部

佐々木雄彦

シンポジウム 2：6月9日（金）

「細胞内脂質蓄積と代謝調節」

オーガナイザー： 宮崎 章 （昭和大学 医学部）
板部 洋之 （昭和大学 薬学部）

- 2-1. 細胞内コレステロールエステル化酵素 (ACAT) の病態生理
昭和大学 医学部 宮崎 章
- 2-2. コレステロール合成調節因子 SPF
理化学研究所 柴田 識人
東京大学大学院 薬学系研究科 新井 洋由
- 2-3. 新規リパーゼの同定と病態生理学的意義
東京大学医学部附属病院 糖尿病・代謝内科
大須賀 淳一
- 2-4. HDL 新生による細胞コレステロールの搬出
名古屋市立大学大学院 医学系研究科 堂前 純子
- 2-5. 細胞内脂肪滴の成長・退縮と ADRP
昭和大学 薬学部 板部 洋之

第4回イブニングセミナー：6月8日（木）

イノシトールリン脂質情報伝達の新たな展開

—ホスホイノシタイド結合ドメインによるシグナル制御—
東京大学医科学研究所 竹縄 忠臣

特別講演 1

LIPID MAPS and Eicosanoid Lipidomics
University of California, San Diego
Edward A. Dennis

特別講演 2

Lipid-protein interactions in cell signaling and real-time monitoring of
lipid mediators
University of Illinois at Chicago
W. Cho

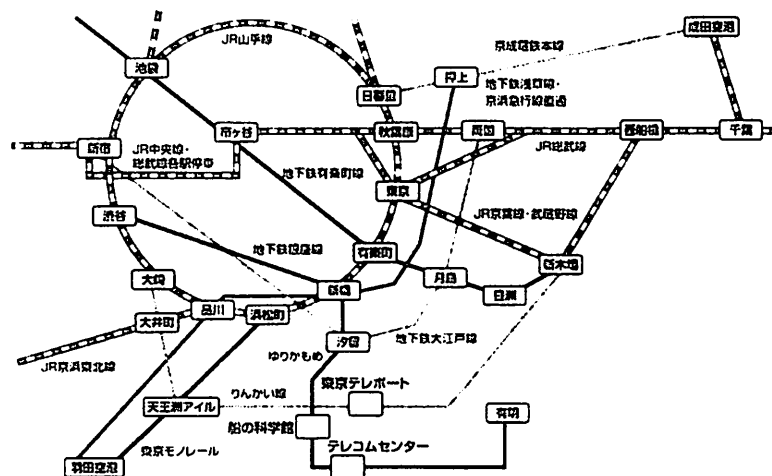
特別講演 3

Transcription factor Sp1 functions as an anchor protein in gene
transcription of human 12(S)-lipoxygenase
National Cheng Kung University, Taiwan
W.C. Chang

第48回日本脂質生化学会会場のご案内

日本科学未来館（東京都江東区青海 2-41、Tel:03-3570-9151）

東京臨海副都心へのアクセスマップ



交通のご案内

① 羽田空港から

羽田空港 → 天王洲アイル（東京モノレール 20分）
 天王洲アイル → 東京テレポート（りんかい線 4分）
 東京テレポート → 日本科学未来館（徒歩 15分）

② 東京駅または品川駅から

東京、品川 → 新橋（山手線、京浜東北線 7分）
 新橋 → 船の科学館（ゆりかもめ 16分）
 船の科学館 → 日本科学未来館（徒歩 5分）

③ 新宿駅から

新宿 →（大崎経由）→ 東京テレポート（埼京線直通りんかい線 23分）
 東京テレポート → 日本科学未来館（徒歩 15分）

平成18年度 日本脂質生化学会総会のお知らせ

上記の総会を平成18年6月8日（木）18:30～18:50に日本科学未来館7階において開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 西島正弘

- 議題
1. 平成17年度事業報告
 2. 平成17年度決算報告ならびに監査報告
 3. 平成18年度事業計画ならびに予算案
 4. その他

平成18年度 日本脂質生化学会幹事会のお知らせ

上記の総会を平成18年6月8日（木）昼頃に日本科学未来館において開催いたします。（開催時刻・会場は改めてご案内差し上げます）幹事・名誉会員の皆様のご出席をお願いいたします。

会長 西島正弘

- 議題
1. 平成18年度日本脂質生化学会総会への提案事項の検討
 2. その他

第 48 回日本脂質生化学会演題の募集

○演題の申し込みについて

本年度も演題登録は「大学医療情報ネットワーク(Umin)の ELBIS システム」を用いて、インターネット上から行います。連絡用に電子メールのアドレスが必要ですので、各自ご用意下さい。また印刷用の講演要旨は、昨年までと同様に紙媒体に印刷した物を事務局まで送付して頂きます。演題登録の開始は 2 月 15 日(予定)、締め切りは 2006 年 3 月 24 日です。講演要旨の締め切りは 3 月 31 日(必着)です。

○ 演題登録の仕方

- 1) 次ページの作成要領に従って講演要旨を作成して下さい。「要旨(600 字以内)」は演題登録の際に必要ですので、ワープロファイルまたはテキストファイルをご用意下さい。
- 2) 日本脂質生化学会のホームページ(<http://nutrition.food.ocha.ac.jp/JCBL/>)にアクセスし、「第 48 回日本脂質生化学会演題登録」を選択して下さい。
- 3) 与えられた指示に従って演題登録を行って下さい。必須項目を空欄のままにしておきますと、登録ができませんのでご注意下さい。登録内容は締め切りまで変更可能ですが、登録の際に入力したパスワードが必要になりますので、必ずメモを取って下さい。
- 4) 登録終了後、抄録登録[登録番号]というタイトルの電子メールが発表代表者に届きますので必ず保存しておいて下さい。
- 5) インターネットが使用できない方、登録ができない方は、講演要旨をお送り頂く前に、以下の講演要旨送付先(担当：青木淳賢)までご連絡下さい。

○ 講演要旨送付先(講演要旨とコピー 2 部をお送り下さい)

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学大学院薬学系研究科衛生化学教室内
日本脂質生化学会 講演要旨受付
電話:03-5841-4723 FAX:03-3818-3173
電子メール JCBL@congre.co.jp

○ 学会についてのお問い合わせ

〒142-8555 品川区旗の台 1-5-8
昭和大学薬学部 衛生化学教室
Tel: 03-3784-8196 Fax: 03-3784-8245
E-mail: kudo@pharm.showa-u.ac.jp

第 48 回日本脂質生化学会 講演要旨作成要領

1. テンプレートを使用する場合 <http://nutrition.food.ocha.ac.jp/JCBL/> から「講演要旨作成テンプレート」をダウンロードし、マイクロソフトワードで作成して下さい。テンプレート上で入力すれば、字体や大きさが統一されます。
2. テンプレートを使用されない場合は以下の要領で作成下さい。
 - * A4 の白紙に、縦 260 mm x 横 170 mm の大きさに印刷して下さい。原則として字の大きさは 12 ポイント、フォントは「MS 明朝」をご使用下さい。要旨集印刷の際、4/5 程度に縮小されて印刷されます。図表は写真やコピーを糊付けしてもかまいません。ページ番号は付けしないで下さい。
 - * 演題名：全角 8 文字目から書き始め、2 行以内に治める。
 - * 氏名・所属：演題名より 1 行空ける。全角 8 文字目から氏名を書き、所属は適当な略記を用いて() 内に入れる。発表者(または連絡著者)の電子メールアドレスを記載してください。
 - * 要旨：氏名・所属より 1 行空ける。全角 1 文字空けて書き始める。全体を枠で囲む。
 - * 本文：要旨より 2 行空ける。
3. 講演要旨の送付にあたって
 - * 講演要旨の裏側に鉛筆にて印刷順を記し、コピー 2 部と共に厚紙などで保護して、前ページの「講演要旨送付先」までお送り下さい。次ページにラベルがありますのでご利用ください。
 - * 演題登録後に届いた「抄録登録[受付番号]」というタイトルの電子メールを印刷して同封して下さい。

(例)

新しいロイコトリエン B4 受容体 BLT3 のクローニングと解析

○東大太郎、京大花子(未来大・理・応用生命)、九大次郎(現在大・医・生化学)

toudai@m.u-tokyo.ac.jp

強力な生理活性脂質であるロイコトリエン B4 の新しい受容体 BLT3 をクローニングし、過剰発現細胞を用いて解析を・・・・・・・・

先に我々はロイコトリエン B4 の二つの受容体である・・・・・・・・

講演要旨を送る際には、この頁をコピーして下記のラベルを切り抜き、封筒にお貼りください。締切は平成18年3月31日です。なお、WEBからの演題登録（締め切り3月24日）を忘れずに行ってください。

〒113-0033

東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学薬学系研究科
生化学教室 細胞情報部門

日本脂質生化学会抄録受付

第48回日本脂質生化学会を開催するにあたって

実行委員長 工藤一郎

平成18年6月8日（木）、9日（金）の2日間にわたって、第48回日本脂質生化学会の開催を担当いたします。「脂質生化学研究：新しい胎動」をメインテーマに掲げました。場所は東京台場の日本科学未来館です。台場は東京湾にある東京臨海副都心の中心地で、新しい東京の名所の一つです。日本科学未来館は宇宙飛行士の毛利衛さんが館長をしている博物館で、ロボットなど最新の自然科学系の展示が楽しめます。学会では建物の最上階である7階にある3会場を使用しますが、学会参加者は館内の見学がフリーですので、学会だけでなく博物館もお楽しみください。交通の便ですが、新橋からゆりかもめ、あるいは埼京線直通のりんかい線を使って最寄り駅に到着します。（羽田からのモノレールの場合、天王洲アイルでりんかい線に乗り換えられます。）多く研究者の先生方、学生諸君に参加していただきたいと思っております。

思えば1980年に野島庄七先生の研究室にアメリカ留学からよび戻していただき、約1ヶ月後に岐阜で開催された脂質生化学会研究会（第22回）が、帰国後に初めて参加した学会でした。留学中は遺伝子工学に夢中でしたし、ホスファチジルコリンの構造も書けないほど脂質には全くの素人でしたが、留学直後で“アメリカ的”だったのででしょうか、2日間の会期中は大部分の演題を会場の最前列の席で聴きました。隣には多くの会場で山川民夫先生が座っておられ、若干の居心地の悪さを感じつつも、「この人は誰だろう？」と思ったことを覚えております。（当時、私は山川先生を認識できておりませんでした。）以来、毎年「自分のグループからの研究業績の重要な部分は脂質生化学で発表する」ことをモットーに研究生活を送ってきており、私にとって脂質生化学会是最も大切な研究会です。

今回、年会の企画を担当させていただき、大変に名誉なことと思っております。シンポジウムとして、「脂質シグナリング研究の最前線：新たな世代へ」（座長：村上誠、横溝岳彦）、「細胞内脂質蓄積と代謝調節」（座長：宮崎章、板部洋之）の二つのテーマを取り上げました。最近恒例となったイブニングレクチャーは、東大医科研の竹縄忠臣先生にお願いしました。ほかに特別講演として3人の外人を招待する予定ですが、そのうち2名はアジア出身の脂質研究者です。近い将来、日本の脂質生化学会に韓国や台湾から多くの研究者が参加してくれる契機となつてほしいと思い企画しました。

若い脂質研究者が脂質生化学会を重要な情報授受の場であると位置づけられるよう努力したいと思っております。先生方のご協力を切にお願い申し上げます。

第47回日本脂質生化学会を開催して

金沢大学大学院医学系研究科 分子薬理学分野 吉本谷博

平成17年6月2日(木)と3日(金)の2日間、本学会を金沢市観光会館で開催させていただきました。全国各地から216名の参加をいただき、幸い好天に恵まれて無事終了することができました。

一般演題数は85題で、すべて口頭発表で2日間にわたって活発な討論が行われました。1日目のシンポジウム「脂質と形態形成」では、スフィンゴ脂質、PAF アセチルヒドロラーゼやPIP 5キナーゼが脂質形成や神経突起リモデリングにおいて重要な役割を果たすことや、配偶子形成におけるアポトーシス細胞の食食の際にホスファチジルセリンが目印分子となることなどが発表され注目されました。2日目のシンポジウム「エンドカンナビノイド研究の新展開」では、米国 Scripps 研究所の Benjamin F. Cravatt 博士によるエンドカンナビノイドシグナリングの酵素的調節の講演や、神経シナプスの逆行性伝達における内因性カンナビノイドの役割の発表が行われました。また、ランチョンセミナーでは、当研究科の馬淵宏教授による「高脂血症治療の現状と将来展望」と、田口良教授(東大院医)による「脂質メタボローム(lipidomics)の質的分析による網羅的、特異的リン脂質解析法」が行われ好評でした。また、イブニングセミナーでは、わが国が世界をリードしている研究分野である酸素添加酵素(オキシゲナーゼ)、コレステロール生合成およびアラキドン酸代謝の研究において先導的な活躍をされている山本尚三教授(京女大、徳島大名誉教授)が、わが国における脂質研究の流れの一側面を紹介されました。その後の懇親会には110名を超える参加をいただき、会員相互の懇談や情報交換はもちろん、金沢伝統の加賀万歳と踊りを堪能していただけたのではないかと考えております。

学会の準備は副委員長として医学系研究科の多久和陽教授と、同研究科の中西義信教授の多大なご協力をいただきました。運営については、関係する3分野の教職員と大学院生諸君のご協力で、会場設営、参加・発表受付、プロジェクター操作など自前で行いました。特にCravatt博士の招聘については、永井記念薬学国際交流財団から貴重な助成をいただき、これについては和久敏三教授(帝京大薬)や上田夏生教授(香川大医)に大変お世話になり感謝しております。また、西島正弘会長、脊山洋右前会長、事務局の新井洋由教授や青木淳賢助教授をはじめ学会関係者の先生方、ランチョンセミナーと展示会に協賛いただきました企業や、全国から参加いただきました多く皆様に厚くお礼を申しあげる次第です。本学会の今後益々の発展を祈念して私のお礼の挨拶とさせていただきます。

第47回日本脂質生化学会に参加して

九州大学大学院 生物資源環境科学府 生物機能専攻 吉村征浩

去る、2005年6月に金沢で行われた第47回日本脂質生化学会に参加しました。本学会への参加は、仙台で行われた第45回に続いて2回目になります。金沢は初めて訪れた場所で、学会の昼食休憩中に会場近くの兼六園を散歩しました。当日は小雨が降っていましたが、園内の川に沿ってアヤメがきれいに咲いており、口頭発表前に心が和みました。

今回の脂質生化学会では、「中性セラミダーゼはスフィンゴシン-1-リン酸を介した血管新生を制御する」という題目を発表しました。近年、セラミド(Cer)とその代謝物であるスフィンゴシン(Sph)およびスフィンゴシン-1-リン酸(S1P)は細胞機能を調節する新しい脂質メディエーターとして注目されています。Sphは*de novo*合成されず(デルタ4デサチュラーゼがジヒドロスフィンゴシンを基質としないためです)、セラミダーゼ(CDase)をによるCerの加水分解によって生成するので、CDaseはSph、S1Pを介した情報伝達系の重要な酵素と考えられています。CDaseには酸性、中性、アルカリ性に最適pHを持ち、細胞内局在が異なる3種類が存在しますが、どのCDase分子種がS1P産生とS1Pシグナリングに関与しているかはわかっていません。私はゼブラフィッシュをモデル生物として用い、中性CDaseがゼブラフィッシュの初期発生、特に血管系の発生に重要であることを明らかにしてきました。今回の脂質生化学会ではゼブラフィッシュ初期発生における血管系の構築にS1Pおよびその受容体に関与しており、中性CDaseがSph産生を介してS1Pシグナリングに重要な役割をしていることを発表しました。発表が終わった後、東大の青木先生、金沢大学の多久和先生をはじめとする多くの先生方に鋭い質問と貴重なコメントを頂きましたが、これから研究をすすめるにあたって、とても助けになるものばかりでした。

本学会は、すべて脂質を対象にした内容なのでどの発表も興味深く感じました。特にS1P受容体と構造が似ているリソホスファチジン酸受容体(LPA3)の個体レベルでの解析に関する発表が印象に残りました。LPA3が受精卵着床において重要な役割をしていることをノックアウトマウスの詳細な解析により明らかにした研究です。マウスを用いた脂質代謝及びシグナリングの機能解析は

今回の題目にも数多くありましたが、ゼブラフィッシュを用いた個体レベルでの解析はまだ少ないようです。ゼブラフィッシュは小型の熱帯魚ですが、発生の基本的なボディプランはヒトと変わりません。体外受精で、卵が透明なため、発生の初期過程、特に血管系の発生過程の観察には非常に適したモデル生物です。血管系の恒常性の維持やその破綻としての疾患には脂質が深く関与していると考えられます。今後、もっと脂質生物学・生化学の分野でゼブラフィッシュを用いる仲間が増えればいいなと思う今日この頃です。

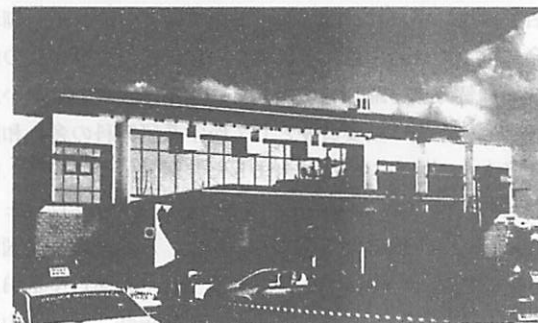
コルシカ島で開かれた第 46 回国際脂質生化学会(ICBL)に参加して

北里大学医学部 中村和生

第 46 回国際脂質生化学会(International Conference on the Bioscience of Lipids, ICBL)は地中海に浮かぶコルシカ島の首都アジャクシオ(Ajaccio)で、9 月 20 日から 24 日まで開かれました。コルシカは 13 世紀終わりからイタリアのジェノヴァに属していました。1729 年から 40 年間はコルシカ革命とも呼ばれる独立戦争期となりますが、ジェノヴァは独立を認めず、代わりにフランス軍にコルシカ制圧を依頼するのです。そして 1769 年フランス軍は、闘士パスカル・パオリ率いる革命軍を圧倒し、フランスによる統治が始まったのです。そして奇しくもこの年、ナポレオンがアジャクシオで生まれています。コルシカ語は中世トスカナで使われていた言語に近いそうです。日本語ではコルシカと呼びますが、これはイタリア語由来でフランス語ではコルスといいます。土地名を示す看板などにはフランス語とコルシカ語両方が書いてあることが多いようでした。そしてそのフランス語表記の方がペンキで塗りつぶされているのを見かけました。コルシカでは今でも民族独立をめざすグループによるテロが時々起こっているということを思い出させます。

さてコルシカ島に学会で行くという誰もそんなところで開かれる学会などあるのかと怪訝な顔をしました。よっぽど探してそこである学会を見つけたんだろうなどと口の悪いことを言う人さえありました。しかしそんなことはありません。私が日本脂質生化学会(JCBL、当時は研究会といった)に入ったのは東京医科歯科大の飯田静夫先生の大学院生だったときですからもう 20 年以上前のことです。それ以来 JCBL のサーキュラーに出ている案内を見て一度 ICBL に参加してみたいと思っていたのですが、それがやっと実現しました。

今回の参加者は 220 名ほど。最も多いのはフランスで 53 名でしたが、なんと参加者数第 2 位は日本の 24 名でイタリアの 22 名を超える数ということでした。今年のセッションは(1)脂質と遺伝子発現、(2)コレステロールの逆行輸送と細胞内輸送、(3)細胞膜の脂質ドメイン、(4)ホスホリパーゼ、(5)肥満、糖尿病とエネルギー代謝という 5 つからなり、ポスター発表ではこれらに加えて「その他」の項目が設定されていました。それぞれのセッションで 10 題ほどの口頭発表がありました。ポスターでは(1)と(3)関連の演題が 20 題以上、そのほかのセッション関連がそれぞれ 10 題くらいという内容でした。ポスター発表には日本からは 15 演題が出ており、参加者数だけでなく内容的にも日本人研究者は多いに貢献していました(アブストラクトは Chem. Phys. Lipids, 136(2)に掲載されています)。



学会場の Palais des Congrès

ほとんどの参加者が学会指定のホテルに宿泊していましたが、これは学会場から湾をはさんで対岸のボルティッシオというところにあつて毎日船で往復しました。これもまた一興、潮風が気持ちよいものでした。

1 日目の講演では、高度不飽和脂肪酸(PUFA)関連と Peroxisome Proliferator - Activated Receptor (PPAR) 関連の話題が豊富でした。日本からは奈良女子大の井上裕康先生が「フレンチパラドックスと PPAR」の話をユーモアも交えて発表されました。またこの日は、リポドミクスというタイトルで脂質データベースについての紹介と報告が行われました。E. Dennis が現在アメリカで進行している LIPID MAPS について、また F. Spener がヨーロッパでの取り組みについて話をしました。Dennis は日本の脂質データベースである LipidBank (<http://lipidbank.jp/>) について、“most extensive database” という表現で言及され、発表後のコメントでお茶の水女子大の脊山洋右先生(日本脂質生化学会前会長)が日本脂質生化学会としてのデータベースへの取り組みについて話をなさいました。日本、アメリカ、ヨーロッパの脂質データ

ベースはそれぞれ独自の特徴を持って発展していますが、同一の脂質にはデータベース間で基本的に共通の ID 番号を付けること(J. Lipid Res. 46:839-61)で合意に達していることについても報告がありました。2 日目には理化学研究所の小林俊秀先生が新しく開発された脂質プローブであるライセニンを用いた膜脂質ドメインについて招待講演をされました。



ホテルから学会場まで毎日この船で往復(対岸がアジャクシオ)

されました。3 日目にはかつて ICBL の会長であったベルギーの A. Lagrou がコレラトキシンのクラスリンを介するエンドサイトーシス系の話をされました。引退する彼にとって最後の発表であるということで、サイエンスの話の後に ICBL の歴史について紹介されましたが、感極まって言葉につまるという場面もありました。最終日は糖尿病関係のセッションでしたが、実は小生抜け出して、コルシカ唯一の大学があるコルテ訪問に出かけてしまいました。コルテはコルシカ島の中心部にある盆地で、コルシカ独立運動の中心地でもあったようですが、そびえ立つ山々の景色がすばらしいところでした。島ということばからは想像できないかもしれませんが、モーパッサンが「海から聳える山」と形容したというコルシカ島は、2500m 級の山が連なっているのです。旅行の愉しみの一つはその土地の食べ物や酒ですが、コルシカではロゼワインが非常にポピュラーであることを発見しました。宿泊したホテルのディナーでもテーブルの上のワインは赤とロゼ。コルシカの気候にあっているのか、ここで飲んだロゼは意外な程おいしく感じました。高級なロゼもあり、例えば Clos Culombu などなかなかのものでした。日本ではまずお目に掛かれないと思うので、コルシカに行ったら是非試してください。学会のオープニングレセプションの時にも甘い白ワインが出ていましたが、コルシカではマスカットのスイートワイン(Muscat-du-Cap-Corse)が有名で



Colomba ビール

す。我々の感覚だとデザートワインですが、コルシカのレストランではアペレティブにこの種の甘いワインを出していました。またコルシカでは栗が非常に有名で、粉にして小麦粉のように使用したり、ペーストにしたり、色々に利用されているようです。余談ながら栗の実にはアラキジン酸(C20:0)をかなり含むという特徴があります。Pietra(ピエチュラ)というビールの原料にも栗が使われています。ビールといえば Clomba という小麦の濁ったビールもあり、これにはネズ(gen_vrier)やミルト(myrtle)などのハーブで香りがつけてあつて癖になりそうな味でした。コルシカはハーブが豊富で同伴者のツアーでは何種類もの生の見本が配られたそうで、良い香りがしていました。クッキーの一種、Canistrelli も結構気に入りました。いろいろな種類があるようですが、買ったのはアニス入り。素朴でおいしいものでした。地中海といえはすぐに魚介類の料理を思い浮かべますが、コルシカでは、地方にもよりますが多くの人は山に住んでいた(これは海から攻めてくる敵から身を守るためであつたようですが)ので、ブタ、イノシシ、ヒツジといった動物が食料となつてきたようです。もちろん今では豊富な海の幸が手に入ります。アジャクシオでは午前中だけ学会場近くのビルの1階が魚市場になりたくさんの魚屋が店を開いていました。残念ながらシャルキュトリ(ブタのハムやソーセージ類)やチーズの研究は今後の課題として残りましたが、生涯にもう一度コルシカを訪ねる機会があるかどうかは疑問いところでした。

ガラディナーの時には恒例のポスター賞が発表されましたが、たまたま同じテーブルだったブエノスアイレスの Sterin-Speziale も選ばれて賞を受けました。接着斑の維持にホスファチジルイノシトール-4,5-ビスリン酸を含むラフトが重要という内容でした。ちなみに私がかつてニューヨークに留学していたときのアルゼンチンの友人を彼女夫妻が知っていて、世の中狭いものだと言うことになりました。こんなことも国際学会の小さな楽しみといえるでしょう。

ICBL は “to provide a friendly and intellectually stimulating forum...” と謳っています。今回初めて ICBL に参加して、昔の脂質生化学研究会の雰囲気似ているところがあると感じました。会場が一つだけですべての講演を聴くことができるのもいいものだと思います。ヨーロッパ主導の学会のためか、アメリカの学会とはひと味違います。日本からの連絡委員として脊山先生が 16 年にわたり多大な貢献をされましたが、2006 年からは北海道大学の五十嵐靖之先生にバトンタッチされます。ICBL 会員の皆さん、成果を持って ICBL に参加されことをおすすめします。個性的なヨーロッパの研究者を知ることができますし、ポスター賞に選ばれば賞金がもらえます。またヨーロッパの小都市で開かれることが多いのも魅力です。2006 年はハンガリーのペシュ、2007 年はフィンランドのトゥルクで開催です(<http://www.icbl.unibe.ch/>)。

第 47 回 国際脂質生化学会議

47th International Conference on the Bioscience of Lipids
(ICBL)

日時：2006 年 9 月 5 日(火)～10 日(日)
場所：ペーチュ (ハンガリー)

演題締切：2006 年 5 月 1 日(月)

Correspondence:

Institute of Biochemistry
Biological Research Center
Hungarian Academy of Sciences
Temesvári krt. 62.
H-6726 Szeged
Hungary
Phone/Fax: +36-62-432048
Email: icbl@icbl2006.hu

Chairman: László Vígh (Chairman)

Ibolya Horváth, Zsolt Török, Gábor Balogh, Győző Garab

János Szöllősi, Klára Kitajka, Zoltán Kóta

日本からの Correspondence は北海道大学薬学部の五十嵐靖之教授です。
Tel: 011-706-3970、E-mail: yigarash@pharm.hokudai.ac.jp

Topics:

1. Metabolism and function of lipids in the brain
2. Sphingolipids
3. Lipids and Stress
4. Membrane microdomains: lipid rafts and caveolae
5. Gene regulation by nucleus-targeted lipid signaling system
6. Lipidomics
7. What are healthy lipids?

<http://nutrition.food.ocha.ac.jp/icbl/>
<http://www.icbl2006.hu/>
にアクセスしてください。



「実際と情報一大山の麓で考えたこと」

鳥取大学医学部病態解析医学講座臨床検査医学分野・血液内科 岡崎俊朗

昨年の正月 1 日付けで、鳥取大学医学部附属病院の検査部運営と血液内科の新設を使命として、京都から鳥取県の米子に赴任致しました。赴任前は、大学病院が米子市にあることも熟知していなかったほどの山陰地方音痴でしたが、ようやく 1 年経って山や川の名前についても大体その方角、地域がわかり、こちらの生活にも慣れてきました。血液内科としての診療は私を含めて 6 名のスタッフで約 25 名の白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの血液悪性疾患患者の治療を、造血幹細胞移植を含め化学療法を中心に実施しております。

こちらに来て最初のころの町の印象ですが、まずは、アメリカの留学先であるノースカロライナ州のダーラムの雰囲気を思い浮かべました。つまり、自然がいっぱいあって、開けた町中に車は通っているのに人が歩いていない。東京や京都の河原町通りの雑踏を思い浮かべると繁華街と言っても少々拍子抜けする米子の光景なのですが、意外にお店にはいると客がずいぶん居て賑やかで、このギャップがアメリカ的に感じられました。大学内の状況も診療現場は、これまでよりもゆったりとした感じであり、何よりも高齢者の多い状況に都会との差異を感じずにはおれませんでした。この状況は、特に血液疾患の患者さんが大学病院の受診前にワンクッション診療を受け専門領域に振り分けることが出来る中規模病院が市内にほとんど無いことが原因だと思われます。同様の中間施設がないことは、研究状況でもいえそうで、大学院を卒業した人たちの受け皿が大学内ばかりでなく企業体の研究施設としても少なく、他の地域へ出て行かざるを得ない状況があり、せっかくの良い人材が流出している感があります。専門性を育てるための研究環境が弱いような状況です。しかしながら、幸いにも、私の専門とする脂質生化学の分野に限って見ますと、比較的多くの脂質の専門家が大学内の基礎講座や生命科学科において研究活動をされており、今後の共同研究が非常に楽しみな場所だとわかりホットしております。

これまで、脂質研究としてスフィンゴ脂質、とりわけセラミドの細胞死における機能解析を血液臨床の現場での新規の診断・治療法開発へと還元すべく基礎研究を進めてきましたが、この先はこれまでの成果を基に、細胞レベルから動物を経てヒトの臨床へと具体的な方向性をもった研究へと発展させてゆきたいと考えています。思えば、1989年に留学中にセラミドの細胞機能を報告

し、その機構を“スフィンゴミエリン (SM) サイクル”と命名して依頼、白血病細胞内の多くのシグナル伝達分子とセラミドの細胞死誘導における相互作用の解明を研究対象としてきましたが、ようやく最近スフィンゴミエリン (SM) ⇄セラミド⇄スフィンゴシン⇄スフィンゴシン-1-リン酸 (S1P) というセラミドを中心とするスフィンゴ脂質代謝制御に携わる酵素遺伝子群のクローニングの完成が間近となり、分子レベルでの研究成果を基に細胞内セラミド量を酵素学的に代謝・生成制御することが可能となって参りました。我々の研究室では、2004年にセラミド+フォスファティチルコリン (PC) ⇄スフィンゴミエリン (SM) +ジアシルグリセロール (DAG) のフォスフォコリンのセラミドからSMへの変換を司るスフィンゴミエリン合成酵素 (SMS) 遺伝子をクローニングすることに成功しました。現在、この酵素の制御によりセラミド量を増強することで白血病細胞の細胞死を誘導し、最終的にヒト白血病などの血液悪性腫瘍の治療にスフィンゴ脂質代謝制御を応用することを現在の研究課題にしています。もちろん、細胞内セラミドの代謝経路はSMS以外にも存在するのですが、現在のところSMを産生する酵素としては唯一SMSが同定・クローニングされており、SM自体の細胞の生死に関わる影響が最近の我々の研究で明らかになるとともにDAGによるPKCの制御もSMSの重要な機能であることから判断して、SMSの制御が細胞の生死を調節する可能性が大いにあると考えております。今後は、細胞レベルから動物レベルへSMSのKOマウスや阻害剤を使用することで、セラミド⇄SM代謝の白血病動物モデルにおける意義を病態制御の観点から検討したいと考えています。

12月の時点で、山陰地方の最高峰大山 (1709m) はすでに頂上付近は冠雪しておりますが、麓の鳥取大学病院付近は海に近く風は強いものの、決して京都より寒いと感じたことはありません。時たま、京都で天気予報を見ると寒気が到来して北陸・山陰地方は大荒れですという予報なのですが、実際の気候はそれほどことはありません。概略の情報と実際の実地の結果のずれにしばしば驚きます。これに似たような概略 (情報) と詳細 (実際) のギャップ構造 (もちろん天気予報は虚構ではなく一応のデータに基づいているのですが) を研究システムも内包しているように思われます。したがって、今後の動物のモデル実験からヒトへの応用を考える際に、実際に我々が自身の目で見、経験した事実を基に研究方針を決めて進んでいくことがより効率的な成果を生むために非常に大切だと感じております。セラミドを中心とするスフィンゴ脂

質代謝制御機構の解明による血液悪性腫瘍の新規治療法の開発を目指すことで我々の研究室が臨床的スフィンゴ脂質研究の日本の中心地の一つとなるように、教室員一同頑張りたいとお考えておりますので、何卒、これまで以上のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

脂質生化学からこれまでの自分の研究を顧みて

臨床医学総合研究所 村上 誠

この度平成 17 年の 3 月末日をもって、10 年間務めた昭和大学薬学部衛生化学教室の助教授を辞し、4 月から臨床医学総合研究所（以下臨床研）に異動しました。身分上は副参事研究員という何ともお役所的な肩書きとなっておりますが、現実的には臨床研の再編に伴い本年度より発足した細胞膜情報伝達プロジェクト（旧薬理部門）のリーダーという立場です。今回の異動に際しては、私の 20 年来の上司であった昭和大学の工藤一郎先生、臨床研の旧薬理部門長であった金保安則先生（現筑波大学教授）に大変お世話になりました。この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。

臨床研での新生活で最も変わったことは実験室と自分の机を置く事務室が初めて離れたことで、一見出世したようで、実情は実験から隔離されてしまった感じがして、何とも不慣れな思いです。かつては常時耳に入ってきた学生の声が聞こえてこないのは実に寂しい感じがします。また、これまでの大学での講義などの雑務から開放された反面、部門長としての責任やラボの運営上の庶務、研究所内に漂う競争意識などで、これまでに体験したことのない重圧を感じています。自他共に認める単純な性格ですので、研究がうまく走り出せば現在感じているストレスなど何処かへ消え去ると思っただけなのですが、今は自分の研究を一日も早く軌道に乗せることが最優先です。新天地でこれまでの研究を更に発展させるとともに、今後の 10 年あるいは 20 年を見据えて、自分の研究で何を追い求めていくのか、視野を広げて考えていきたいものです。

さて、臨床研での現状はさておき、この場を借りて私の過去 20 年間の研究生活を振り返ってみたいと思います。私が脂質生化学の研究の世界に足を踏み入れたのは、東京大学薬学部の卒業研究で井上圭三先生率いる衛生化学裁判化学教室に配属された時に遡ります。与えられたテーマは、ラット血小板より精製された新規ホスホリパーゼ A₂ (PLA₂) に対するモノクローナル抗体を作製するというものでした。今ではモノクローナル抗体を取る作業など当たり前のように普通に行われていますが、当時はモノクローナル抗体技術の黎明期で、系の導入に大変苦労したことが昨日のこのように思い出されます。この際には当時助手であった梅田真郷先生（現京都大学教授）に多くの助言を頂きました。この時抗原として用いた PLA₂ は現在では IIA 型としてよく知られていますが、私は作製した抗体を用いて本酵素が炎症部位に誘導されることを免疫化学的に証明し、修士の学位を得ました。博士課程では、私自身が激しいアレルギー体質であったことからアレルギーの担い手である肥満細胞に関心を持ち、その

細胞生物学を独学で勉強しました。肥満細胞の培養に必須であるサイトカインは当時非常に高価で力価も低く、高力価のサイトカインがたやすく手に入る現在とは隔世の感があります。紆余曲折の結果、研究はいつの間にか PLA₂ に帰結し、肥満細胞に機能の異なる複数の PLA₂ があることを報告して博士の学位を修得しました。

日本学術振興会の研究員として井上圭三先生の元で引き続き 2 年間を過ごした後、私は肥満細胞の細胞生物学を更に勉強したく、この分野の世界的第一人者である米国ハーバード大学の K. F. Austen 教授の元に留学しました。この頃は同定されたサイトカインの数が飛躍的に増え、その受容体やシグナル伝達機構にも大きな進展が見られた時期で、莫大な資金力を持つ Austen 教授の元で、これまで極貧的に使わざるを得なかったサイトカインを湯水のごとく消費できる環境に恵まれ、楽しい研究生生活を送ることができました。留学当初は脂質生化学を離れてサイトカインのシグナル伝達を研究したいと思っていたのですが、与えられたテーマは肥満細胞のアラキドン酸代謝で、結局のところ脂質生化学に踏み止まることとなりました。シクロオキシゲナーゼ (COX) 経路や 5-リポキシゲナーゼ (5-L0) 経路に関連する酵素の抗体や cDNA が、Austen 教授の電話一本で米国内の至る所から即座に入手できました。この当時は（今は多少ブームが去った感がありますが）COX-2 が発見された時期にも当たり、アラキドン酸代謝研究分野の一種の転換期であったと思います。肥満細胞の研究領域においてアラキドン酸代謝の分子生物学は未開拓の分野であったため、出すデータが即ち新発見とみなされました。私の留学時代の最初の論文は、肥満細胞において COX-1 と COX-2 が使い分けられるというもので、これは後にアラキドン酸代謝酵素群の分子種間の選択的な機能カップリングという新しい概念に発展していきました。また、同じ時期に Austen 教授の長年のテーマであった LTC₄ 合成酵素が同研究室の B. Lam により世界に先駆けてクローニングされ、私も喜びの輪の中に加えてもらったことを記憶しています。COX や 5-L0 を中心に研究を進めていくうちに、その代謝系上流の PLA₂ をストーリーの展開上無視できなくなり、最終的にはまたしても PLA₂ に舞い戻ることとなりました。それどころか、Austen 研で私の直属の小ボスであった J. Arm までが PLA₂ の世界にのめり込み、現在では PLA₂ 分野の重鎮の一人として活躍しています。おそらくこれは私が Austen 研に残してきた最も大きな影響のひとつです。ちなみに、現在私のラボにいる V 型 PLA₂ 欠損マウスは、J. Arm から最近寄贈されたものです。

Austen 研の研究報告会、いわゆるラボミーティングは非常にタフで、彼の日程にあわせて平均すると三週間に一度、食事を取らずにコーヒー一杯だけで朝から晩まで全員が研究報告をするというものでした。Austen 教授は米国人にしては珍しく昔ながらの木製鉛筆を片手に各人の報告を丹念に記録し、翌日それを古めかしいタイプライタ

一でまとめて、彼の厳しい（時に勘違いの）コメントを付け加えて全員に配付していました。ご老体にしてこのタフさはどこからくるのかとよくポストドク仲間の間で議論したのですが、80歳を控えた現在でもこのスタイルは変わらないと聞いております。Austen 研では研究に対する情熱と姿勢の多くを学びましたが、中でも論文の書き方に関して彼から修得した教訓は他に得難いものです。赤字だらけの草稿を持って彼のオフィスを何度も往復し、その度に表現法や構成を学んだ経験は、私の財産といえます。帰国から数年後に久々に Austen 研を訪問した折、かつてのポストドク仲間が私の論文を評して「Frank (Austen のこと) が書いたみたいだ」と言ってくれた時には本当に嬉しかったものです。

二年間の留学を終えた後は、東京大学から昭和大学に移られた工藤一郎教授に講師として迎えられ、翌年には助教授となりました。大学内の雑務に関しては工藤先生が私を全面的にカバーして下さいましたこともあって、自分の予想以上に研究を思い通りに展開できたように思います。留学時代の経験と知識が糧となったことは言うまでもありませんが、昭和大学薬学部衛生化学教室の面々も、私の時に不条理な要求に答えて頑張ってくれました。昭和大学での研究の内容は脂質生化学会年会で毎年のように報告しておりますので詳細は省略しますが、大きく PLA₂、PGE 合成酵素 (PGES)、肥満細胞の三つに分類できます。PLA₂ についてはこの 10 年間で急激に分子種の数が増え、現在では 20 種類以上に達していますが、私は各 PLA₂ 分子種の組織内発現とアラキドン酸遊離における役割について網羅的に解析し、細胞レベルにおける機能的相違と調節機構を報告してきました。最近では数種の各 PLA₂ 分子種の遺伝子改変マウスを用いて個体レベルでの各分子種の機能を解析しており、これは臨床研に引き継いで進めていく予定です。PGES の研究は元々、当時北里大学教授であった大石幸子先生との共同研究の一環でマクロファージに誘導型の PGES 活性を見出したのが発端で、以後複数の PGES 分子種の同定と性状解析を行い、各酵素が上流の二種の COX と異なる機能的カップリングを示すことを明らかにしました。更に遺伝子改変マウスを用いて各 PGES 分子種の個体レベルでの機能解析を実施し、分子種のひとつである mPGES-1 が発痛、炎症、癌等の病態に密接に関わることを報告しました。PGES の研究は昭和大学工藤研のメンバーが今後も発展させていくことと期待しています。肥満細胞に関しては脂質生化学とは多少離れますが、分化成熟の過程で発現変動するユニークな因子群の解析を行ってきました。そのうちのひとつの分子については欠損マウスの解析を通じて、個体レベルでも肥満細胞の分化やエフェクター機能に関わることを実証しつつあります。花粉症をはじめとする種々のアレルギー疾患が社会問題となっている現在、肥満細胞の研究は今後益々その重要性を増すものと予想され、できれば脂質生化学を絡め

て今後も展開させていきたいと考えています。

いうまでもなく、脂質研究はポストゲノム時代に発展が期待されるサイエンス領域のひとつです。例えば生理活性脂質は生体膜上や核内受容体のリガンドとして機能します。微量な脂質分子は生体膜のダイナミックな変動に伴って特有な構造をもたらします。情報伝達系のタンパク質が機能を発現するために、特殊な脂質分子が必須な役割を担う場合もあります。脂質研究は今後も大いに注目されている研究領域であり、私は今後も特徴的かつ多様な構造の脂質分子に注目しながら、新しい生物現象を見逃すことなく国際的な研究を展開していきたいと考えています。私のこれまでの大学薬学部での研究を称すると、「新しい創薬の標的分子の同定をめざした生理活性脂質の生合成経路とその調節機構に関する研究」とでもなろうかと思えます。これまでは、病態を意識しつつも生命薬学に立脚した標的分子の基礎研究を主体としてきました。今回、臨床研へと研究の場を移したことを契機に、基礎研究の成果を更に臨床の場へと展開応用し、自らの研究成果をもって医療に貢献できるように研究を遂行していくつもりです。私の研究が炎症、癌、生活習慣病などの脂質に関わる疾患の制御を目指した創薬に役立つ新しい分子標的を提供することとなれば、社会にも貢献できるものと信じています。

会の活動状況

1 第47回日本脂質生化学会・研究集会の開催

実行委員長 : 金沢大学・医学系研究科・吉本谷博教授、副委員長 多久和 陽教授
 日時 : 2005年6月2日(木)、3日(金)
 場所 : 金沢市観光会館・中央公民館
 演題数 : イブニングセミナー1、ランチョンセミナー2、シンポジウム10、一般演題85、
 参加者216名

2 平成17年度日本脂質生化学会・総会の開催

平成17年6月2日(木)、金沢市観光会館にて開催された。

総会次第

西島正弘会長の挨拶の後、以下の議事が進行された。

(1) 平成16年度事業ならびに決算報告

平成16年度事業報告ならびに決算報告がなされ了承された。

(2) 平成17年度事業計画ならびに予算案

平成17年度事業計画ならびに決算報告がなされ了承された。

(3) 役員・幹事の選出および名誉会員の推薦

平成18～21年度幹事の選出：平成17年12月31日までの任期の幹事19名に加え、以下の6名の新幹事が推薦され、了承された。

杉浦隆之(帝京大学薬学部)
 岡崎俊朗(島根大学医学部)
 金保安則(筑波大学医学部)
 中西義信(金沢大学薬学部)
 村上誠(東京都臨床医学総合研究所)
 横田一成(島根大学生物資源科学部)

(4) 平成18年度(第48回)学会準備状況の報告

実行委員長 : 昭和大学薬学部・実行委員長 工藤一郎教授
 日時 : 2006年6月8日(木)、9日(金)
 場所 : 日本科学未来館(東京 お台場)

(5) 平成19年度(第49回)学会実行委員長の選出

北海道大学薬学部 五十嵐靖之教授が実行委員長に選出された。

(6) 脂質データベースについて清水孝雄先生より説明がされた。

- ・データベースの維持に関して JST のサポートが終了したが脊山先生のご努力でサポートが開始されたとの由の報告があった。
- ・LC-MS から得られるデータから直接脂質の検索が可能となるソフトウェア開発に関して新構築委員会を作るとの報告があった
- ・海外(米国 Ed Dennis 博士)の LIPID MAP 研究が先行して行われている状況が説明され、脂質の Identification number (I.D.) をどのようにするか議論が必要との見解が示された。
- ・脂質の分類の大枠が米国、日本、ヨーロッパの研究者間で決められ、Journal of Lipid Research Vol. 46, 6839-861 (2005)に掲載されているとの紹介があった。

3 平成17年度日本脂質生化学会・第1回幹事会

日時：平成17年6月2日(木)
 場所：金沢市中央公民館2F第1学習室
 議事：上記総会と同じ

4 平成17年度日本脂質生化学会・第2回幹事会

日時：平成17年12月13日(火) 18:00-20:20
 場所：学士会館赤門分館

議事

- (1) 平成17年度事業報告、決算案の審議がなされ、了承された。事業案は上記総会報告、決算は巻末を参照されたい
- (2) 平成18年度事業計画、予算案の審議がなされ、了承された

平成18年度事業計画

会員数 685名 (平成17年11月29日現在)
 名誉会員 29名
 賛助会員 21社(82口)

役員	会長	西島正弘	(平成18年12月31日迄)
	庶務幹事	新井洋由	(同上)
	会計幹事	工藤一郎	(同上)
	会計監査	脊山洋右	(同上)

名誉会員

山川民夫(名誉会長)、赤松 樹、池沢宏郎、市原宏介、植田伸夫、遠藤 章、小野輝夫、金田尚志、鬼頭 誠、斉藤国彦、鈴木邦彦、武富 保、内藤周幸、永井克孝、野沢龍則、野島庄七、野田万次郎、箱守仙一郎、橋本 隆、林 陽、飯田静夫、藤野安彦、牧田 章、矢野郁也、山添三郎、山本 章、山本尚三、和久敬蔵

幹事

(任期 平成18年12月31日迄)

池田郁男、岩森正男、上田夏生、宇田 裕、内海英雄、工藤一郎、小堤保則、島崎弘幸、鈴木康夫、瀬高守夫、高桑雄一、高野達哉、多久和陽、塚谷博昭、徳村彰、二木鋭雄、西島正弘、宮澤陽夫

(任期 平成19年12月31日迄)

青山俊文、阿部敏明、荒木英爾、有田 喬、五十嵐靖之、猪川嗣朗、和泉孝志、板倉弘重、伊藤俊洋、井上圭三、入谷信子、梅田真郷、及川真一、大島美恵子、岡本光弘、奥田 拓道、奥山治美、川口昭彦、菊川清見、久下 理、久保田 勝、黒木由夫、齋藤政樹、渋谷勲、杉田隆海、鈴木明身、谷口直之、玉井洋一、中川靖一、中野益男、西村顕治、野間昭夫、平林義雄、廣野治子、深見 希代子、水柿道直、宮崎章、柳田晃良

(任期 平成20年12月31日迄)

新井洋由、石永正隆、板部洋之、今泉勝己、上田隆史、太田昭徳、大西正男、岡島史和、賀佐伸省、加納英雄、北 徹、楠瀬正道、小林俊秀、清水孝雄、菅野道廣、脊山洋右、秦 霞哉、平山 修、藤本 健四郎、堀内正公、松澤佑次、三成 脩、宮下和夫、三輪匡男、保田立二、山下 哲、山田信博、山田晃弘、山本徳男、吉岡 亨、吉本谷博、渡部紀久子、渡辺清博

(任期 平成21年12月31日迄)

猪飼 篤、伊東 侶、大木和夫、岡崎 俊朗、笠間健嗣、金保 安則、櫛 泰典、古賀洋介、里内 清、杉浦 隆之、瀧 孝雄、田口 良、竹縄忠臣、田辺 忠、寺本民夫、中島 茂、中西 義信、保坂公平、松本幸次、村上 誠、室伏きみ子、村田紀夫、横田一成、横山信治

(以上113名)

賛助会員:21 社 (計 82 口)

(10 口) エーザイ (株)

(5 口) 小野薬品工業 (株)、キッセイ薬品工業 (株)、協和発酵工業 (株)、塩野義製薬 (株)

第一製薬株式会社 (株)、大日本製薬 (株)、明治製菓 (株)

(4 口) アステラス製薬 (株)、三共 (株)、大正製薬 (株)、山之内製薬 (株)

(3 口) 旭化成ファーマ (株)、(株) エー・イー企画、大塚薬品工業 (株)、(株) 東京化学同人

(2 口) 大塚製薬工場 (株)、花王 (株)、(株) ヤクルト本社、雪印乳業 (株)

(1 口) キュービー (株)、

事業

イ) 平成 18 年度 (第 48 回) 学会

・ 実行委員長 : 昭和大学薬学部・実行委員長 工藤一郎教授

・ 日時 : 2006 年 6 月 8 日 (木)、9 日 (金)

・ 場所 : 日本科学未来館 (東京 お台場)

ロ) 脂質生化学研究 48 巻発行

演題募集 (Circular2006 の発行時に) 1 月下旬

演題申込および原稿締切 3 月下旬

プログラム編成会議 4 月上旬

入稿 4 月下旬

講演集発送 5 月中旬

ハ) 脂質生化学研究 Circular2006 の発行 1 月下旬

ニ) 会議

日本脂質生化学研究会総会 2006 年 6 月 8 日

第 1 回幹事会 2006 年 6 月 8 日

第 2 回幹事会 2006 年 11 月下旬～12 月上旬

(3) 第 48 回日本脂質生化学会の準備状況について工藤一郎先生 (昭和大・薬) から説明があった。

(4) 退会希望の幹事先生に関して、退会が了承された。

(5) 脂質生化学会演題登録に関して、通常通り 2 月中旬に始めることが確認された。また、平成 16,17 年度と同様に演題登録をインターネットを用いて行うことが決定された。抄録集は従来通り、印刷された原稿を事務局に送ることとなった。

平成17年度決算及び平成18年度予算表(案)

収入の部 項目	平成 17 年度		平成 18 年度
	予算	決算	予算
正会員会費	2,000,000	1,686,000	2,000,000
入会金	0		0
賛助会員会費	800,000	820,000	900,000
講演集売上	100,000	180,000	100,000
広告収入	700,000	640,000	700,000
利子	1,000		1,000
雑収入	50,000	1,570	10,000
小計	3,651,000	3,327,570	3,711,000
前年度より繰越金	3,092,998	3,092,998	2,708,060
計	6,743,998	6,420,568	6,419,060

支出の部 項目	平成 17 年度		平成 18 年度
	予算	決算	予算
研究集会補助	900,000	900,000	900,000
会報製作費	180,000	151,184	180,000
講演集製作費	730,000	751,223	730,000
版下準備費	200,000	0	0
旅費	100,000	0	100,000
郵送・通信費	420,000	504,009	450,000
事務用品費	100,000	204,750	150,000
会合費	150,000	143,823	150,000
謝金	50,000	0	50,000
総会経費	5,000	20,000	10,000
事務経費	250,000	250,000	250,000
事務委託費	700,000	740,269	650,000
雑費	10,000	47,250	10,000
小計	3,795,000	3,712,508	3,630,000
次年度への繰越金	2,948,998	2,708,060	2,789,060
計	6,743,998	6,420,568	6,419,060

賛助会員

- | | |
|--------|--|
| (10 口) | エーザイ (株) |
| (5 口) | 小野薬品工業 (株)
キッセイ薬品工業 (株)
協和醗酵工業 (株)
塩野義製薬 (株)
第一製薬 (株)
大日本製薬 (株)
明治製菓 (株) |
| (4 口) | アステラス製薬 (株)
三共 (株)
大正製薬 (株)
山之内製薬 (株) |
| (3 口) | 旭化成ファーマ (株)
(株)エー・イー企画
大鵬薬品工業 (株)
(株)東京化学同人 |
| (2 口) | 大塚製薬工場 (株)
花王 (株)
(株)ヤクルト本社
雪印乳業 (株) |
| (1 口) | キューピー (株) |

日本脂質生化学会 会則

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学会(The Japanese Conference on the Biochemistry of Lipids, JCBL)と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展と向上を図り、あわせて研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。

- (1) 研究集会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者。
- (2) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者。
- (3) 名誉会員は、幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員、幹 事、名誉会長

- (1) 本会は、その運営のために、役員として会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、会計監査1名をおき、役員会を構成する。
- (2) 本会の運営上の重要事項について役員会の諮問に応ずるものとして幹事をおく。
- (3) 役員および幹事は幹事会を構成し、会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長・名誉会員は幹事会に出席して意見を述べるができる。
- (5) 会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする。重任はさまたげない。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項

(4) その他

第7条 経 理

本会を運営するために、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、毎年1月1日より12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は、会計監査によって監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は、会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員の便宜を供する。

本会の事務局は、〒102-8481 東京都千代田区麹町5-1 弘済会館ビル(株)コングレ内におく。

附則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。

(平成14年6月14日改訂)

(平成17年6月2日改訂)

学会事務の取り扱い内容と連絡先

平成 17 年 1 月から日本脂質生化学会の事務局は、(株) コングレ内に置き、以下の事務取り扱いを行うことになっております。

1. 入会・退会の受付
2. 年会費の請求および徴収
3. 所属・住所・氏名等の変更の受付
4. Circular および要旨集の発送とその未着クレーム等の受付

日本脂質生化学会事務局の連絡先

〒102-8481 東京都千代田区麹町 5-1 弘済会館ビル (株) コングレ内

Tel: 03-5216-5588

Fax: 03-3263-4032

E-mail: JCBL@congre.co.jp

日本脂質生化学会の年会費は 3,000 円です。入会ご希望の方は上記の日本脂質生化学会事務局までお問い合わせ下さい。

日本脂質生化学会 会長 西島正弘

〒162-8640 東京都新宿区戸山 1-23-1

国立感染症研究所 細胞化学部

Tel: 03-5285-1158

Fax: 03-5285-1157

E-mail: nishim@nih.go.jp